



函館からトラスト



Dec.2008 No.26

公益信託 函館色彩まちづくり基金 平成19年度助成活動が決定

第15回は5件の助成が決定

※運営委員会で話し合われた各助成団体に対する詳細コメントはホームページ (<http://www.h-nisshou.com/kara/>) をご覧ください。

平成20年2月16日(土)函館市末広町の五島軒本店にて、第24回運営委員会が開催された。平成19年度の助成先について検討され、7件の助成申し込みのうち、5件の助成団体が選定された。助成総額は前年度と同じ150万円となった。

	申請者	助成希望テーマ	希望金額	助成金額
1	函館市公民館活性化ネットワーク「イキネット」 代表者 松石 隆	函館市公民館活性化事業 (公民館マチネ・シンポジウムの開催)	30万円	30万円
2	ペンキ塗りボランティア隊 代表者 小林 暁子	谷地頭町商店街の町並み色彩改善Par3 一町やペンキ塗りワークショップ・XV	54.1万円	54万円
3	はこだて外国人居留地研究会 代表者 岸 甫一	「はこだて外国人居留地マップ」の作成	40.8万円	30万円
4	はこだて元町チャーチフェスティバル 実行委員会 代表者 吉岡 直道	西部地区の町並みのより深い理解を音楽を通して得る。	40万円	18万円
5	エコホスピタリティはこだて 代表者 茂呂 信哉		62万円	
6	まちワーク研究室 代表者 根本 直樹	じろじろ大学「弥生小学校を創る」学科の実践	50万円	18万円
7	仮称)函館大門地区に桜を植える会 代表者 今 均	函館大門地区に「はる(春・張る)」を呼ぶ 桜で憩う街並みづくり	40万円	
計			7件 316.9万円	5件 150万円

※「大門地区に桜を植える会」に対して、からトラスト事務局より100,000円のフォローアップをしました。

新運営委員長あいさつ



公立はこだて未来大学
准教授 木村 健一

公益信託函館色彩まちづくり基金(愛称:函館からトラスト)が15年目を向かえるのを節目に、市民の代表からなる運営委員が一新され、5年間の任期で助成活動に取り組むことになりました。

函館からトラストは今更言うまでも無いことですが、市民グループ「元町倶楽部・函館の色彩文化考える会」がトヨタ財団から得た研究奨励金を住友信託銀行に委託し、運営委員と信託管理人、そして函館からトラスト事務局の協力をもとに、住友信託銀行が基金の運営にあたっ

ている極めて公益性の高いものです。

この端緒となった元町倶楽部の活動は、函館の洋風建築の外壁に時層色環と称するペンキ層を紙やすりでこすり出す、というものでした。一見素朴に見え、関わった人たちの「にこにことした表情」が伝わってくるような活動には、街の変化を本質的に解き明し、どのようにして街並みの美しい「しつらえ」を整えてきたのか!もしくは整えて行くのか、という強いメッセージが含まれています。

洋風建築の色は変化した。そして街並みも。

もちろん!

塗り替えた人は、街の住人だ。

あたりまえだ。

法律や専門家がペンキの色を決めたわけではない。

じゃ、勝手に塗っていたの!?

そうだ。

何故、誰もが美しいと感じる「しつらえ」が継承できたのか。

この「何故」の問いに、助成活動の中でどんな答えが現れてきたのでしょうか。

刷毛を持ってぺたぺたと壁に色を塗りながら、若者達が街のしつらえを整えていく。恒例行事になった「ペンキ塗りボランティア隊」の活動に最も象徴的に現れているように思います。時層色環に残された歴代のペンキ塗り達の気持ちを追体験する。この中で脈々と受け継がれている形としては見えない「何か」を確かに感じ取ることができる。

助成活動の目的は「函館の原点である旧市街(西部地区)の独特の色彩文化を背景にした歴史的町並みの保全・整備、市民参加・提案型のまちづくり活動、いち早く外国文化になじんだ函館にふさわしい国際交流等、さまざまなまちづくり活動に対する助成支援」です。これまで、多くの素晴らしい成果が生み出されてきましたが、今後もこの「何か」を共有しながら、素晴らしい「しつらえ」の実践活動が生まれるよう運営委員一同とともに大いに期待しています。



函館工業高等専門学校環境都市工学科
教授 荻澤 憲吉

ある機会に、このまち函館に対して自分自身が思いを感じていることをそのまま書いた。

「このまちには、海があり、川もあり、山があり、里もある。それらは豊かな恵みをまちにもたらし、人々の暮らしを支え守ってきた。このまちには時代を経て積み重ねてきた「時間」の厚みがあり、海や山からいつも流れてくるさわやかな「風」が、長い時間をかけてこのまちの形をつくってきた。そういう歴史と風土が、このまち函館らしさの固有性や、この地域の魅力的な文化を育ててきた。

そして、わたしたちはこの函館のまちに身を置くことで、今も流れている時間と風を実感することができ、この函館の歴史の中の「現在」という場所に立っている喜びを感じる」…と。

でも、そう書きながら、これまで成長を続けてきた函館のまちが、ある時からいつの間にか肥満体となってしまった上に、高齢化や人口減でその身体が緩みしぼみつつあるという現在の

状況に関して、危機感を感じていた。

函館のまちから活力などが消えかかっている様子を、このまま漫然と見過ごすわけには行かない。むしろ今を機会と考えて、函館のまちにさまざまな手当をするべきである。もっと言えば、今こそ、函館のまちを鍛え上げて、まちの姿かたちをメリハリのあるバランスの取れたスタイルにしよう。まちの骨格を再構成して、必要な場所に筋肉をきちんと付けて、血流や神経系を上手に巡らせよう。それが人の身体に喩えた函館のまちの、これからの都市計画やまちづくりの方向性だと考えたのだが、みなさんはどのように受け取られるだろうか。

いずれにしても、このまち函館の今を肯定的に受け止め、まちづくりにとっても絶好の機会だと考えたい。

からトラストの助成は、この函館のまちの原点の旧市街(西部地区)において行われるまちづくり市民活動を支援するものであり、これまでの助成活動は非常に意義深いものであったと考えている。その運営委員として関わって来られたことは、わたしにとって函館のまちづくりを考える上で、ありがたいことでもあった。これからも、助成活動からたくさん素晴らしい成果が生まれるようにと期待している。

2007年の活動報告①

ペンキ塗りボランティア隊

谷地頭町商店街の町並み色彩改善Part2 一町やペンキ塗りワークショップ・XIV

代表 山口 健太郎

ペンキ塗り替えの準備

1)足場の手配

足場に関しては、この活動に共感してくださり、例年、全面的な協力を得ている地元の小倉工務店さんが、今回もまた、通常10万円以上する足場の運搬、組立、撤去作業のすべてを無料で引き受けていただけのこととなった。これにより費用面での負担が大幅に軽減された。この場を借りて感謝を示したい。

2)ペンキ塗料の手配

シミュレーションにより決定した数種類の色について、それぞれの塗装面積を計算し、例年お世話になっている建装工業(株)札幌営業所(元日本ペイント販売北海道(株))の米澤氏に相談をし、米澤氏をつうじて(株)やすもと札幌店にペンキ塗料を注文した。

3)刷毛等の用具の準備

刷毛等の用具についてはホームセンター(札幌市屯田にあるジョイフルエーカー)で購入した。

4)ペンキ塗りボランティアの募集

案内ちらしを作成(次頁参照)し、函館からトラスト事務局や、その他知り合いの方々をつうじてボランティアを募集した。また、昨年度の活動に参加された一般ボランティアの方々については個別にボランティア募集のちらしを郵送した。

を持たせることとしました。絵と同じく重要な要素である文章も専門的にならないよう、建物の特徴をひとことと言い表せるような短い文章を採用することとしました。メインの絵については、出来る限りシンプルで、素材や形を強調したラフなタッチのものを用いることとしました。題材が建物という事で、素材や形を表す言葉が専門的になり絵本全体のストーリーとしてのつ

Paint Workshop 2007 in HAKODATE



ながりを理解されにくいと考え、ナビゲーターとして『黒ネコ』のキャラクターを描き、素材や形の解説をしてもらったこととしました。試作品を当会コラボレーション展、会員展などで、子供たちや父母の皆様に見てもらい、意見や感想を頂きました。その結果をふまえ再考を重ね出版へと至りました。

ペンキ塗り替えの実施

ペンキ塗り替えは、2007年7月28日(土)、7月29日(日)の2日間にわたりおこなった。今年度のペンキ塗り替えでは、28日の午前中が非常に悪天候であったが、午後から天候は回復し、予定どおり2件の対象物件のペンキ塗り替え作業を無事終わらせることができた。

今年度は教育大学の学生さんをはじめ、函館高等専門学校の学生さん、一般市民の方々の参加もあり、前年に引き続き活気のある活動となった。今回と前回の活動で、ペンキ塗りによって変化している町並みがより鮮明に地元の人々に伝わったのではないだろうか。今後更なる活動を通して、豊かな町並みが地元の人々の活気につながれば幸いである。



参加者の内訳 (計55人。28日39人、29日46人の延べ85人/2日)

- ・函館工業高等専門学校 ----- 2名
- ・北海道教育大学函館校 ----- 26名
- ・函館市民一般参加 ----- 5名
- ・北海道大学 ----- 20名
- ・北海道大学のOB ----- 2名

今後の展望

地元の北海道教育大学函館校の学生や函館工業高校の生徒さん、一般市民の方々には、今年もまた多数ご参加いただいた。これまでの報告書では、北大主導の活動

制から、地元住民による主体的な活動として根付いていくための方策を検討する時期にあるとしている。以前から比べ、函館市内の学生の参加が増えていることから、住民が主体となった活動への転換は可能であると考えられる。さらに、学生だけではなく、商店街に住む人やそこを利用する人の参加を呼びかけることが重要となるのではないかと。

今年度は、地域の商店街の連続した町並みの色彩改善の2年目となる活動であった。今回の活動によって、商店街の一角が塗り替えられ、将来の商店街のイメージをより強く、鮮明に地元の人々に思い起こさせることができたのではないかと。今後さらに持続して活動が続けられることが望まれる。前年度の報告にもあったが、そのためには、活動を広め、市民の手による参加が



望ましい。商店街の町並みがきれいに変わることによって、地元市民の人々の活動に対する意識は高まっていくだろう。活動の手を移していくための基盤は、徐々に堅固なものになりつつあるのではないだろうか。今後の展開に期待したい。



2007年の活動報告②

北海道教育大学函館校「マチワーク研究室」 JUKUプロジェクトじろじろ大学の実践

代表 根本 直樹

活動の目的

今年度も昨年度に引き続き通年で活動を実施し、「JUKUプロジェクト2007」と称しました。JUKUは、Jirojiro University Knowledge Uniqueの頭文字で、「地域に根ざした、学校では出来ない学びの場・交流の場」を子どもたちと共につくっていくということです。函館市西部地区を中心にフィールドワークなどを主に行います。今年度から参加者の対象に中学生を加え、小学3年生から中学生1年生を対象に活動を実施しました。小・中学生と大学生とが共に楽しく活動することを通して、函館という地域を見つめ、学校教育ではなかなかできない学びを共有するとともに、心のよりどころとなる活動を目指します。また、このような活動を通して、地域活性化の一つの原動力となっていけることを目標としています。今年度は特に、私たち大学生は学びを与える側ではなく、小・中学生と共に学ぶ側であることを常に念頭に置き、子どもたちと共に活動をつくっていくことを心がけました。



活動の内容

今年度も活動を上半期と下半期の二つの期間に分け、月に一回の実施を基本に1年間で全9回を実施しました。今年度は、どのような活動にしていきたいかという活動企画から子どもたちの意見を取り入れ、その結果、「マップ作り」に向けて活動を展開していくことになりました。上半期ではまず、小・中学生と大学生が交流を深め、フィールドワークを通して西部地区における基礎知識や「まちワーク」のノウハウを身につけました。その上で8月の

「夏の学校」では、西部地区との比較材料として、じろじろ大学始まって以来初の試みとなる大門・五稜郭・湯の川地区のフィールドワークを行いました。

下半期では、各自が興味のあるテーマについて調査を行い、その「学び」をマップ作りに生かすことにしました。個人調査の活動計画から子どもたち自身が作成し、それぞれの計画に基づいて調査を進め、みんなの調査結果を1冊の冊子にまとめました。また、各自の調査の情報を班で持ち寄り、最終段階のマップ作りにつなげました。まとめの活動発表会では、保護者の方や地域の方々にも見に来ていただき、少しでも活動の成果を地域に発信したいと考えました。

事業実施による成果

今年度から小学3年生から中学1年生までの異年齢集団としての活動となったことにより、上級生が下級生の面倒を見るという姿も見られ、リーダーシップを発揮した子どもたちも少なくありませんでした。また、以前は消極的だった子どもも自発的・積極的に活動する姿を見ることができました。フィールドワークの基礎的技術や、函館市についての認識もそれぞれに深まり、毎回新たな発見があったように思います。大学生も、子どもたちに気づかされる機会が多く、互いに「学びの共有」が出来たのではないかと感じます。



📌 今後の課題

以上のような成果があったと同時に、参加者の年齢幅が大きいことに伴い、発達段階に応じた活動内容の展開が非常に難しいと感じました。成果として述べたように、上級生が下級生をフォローするという点である程度は克服できたように思いますが、来年度以降はこういった問題点も最初から考慮した上で活動を進めていく必要

があります。また、じろじろ大学が「コミュニケーションの場」として、より重要な役割を果たすよう、「遊び活動」を研究し、今後の活動に生かしていきたいと考えます。子どもたちと大学生とが同じ立場で学び、共に「まちづくり」に参画できることを目指していきたいです。

2007年の活動報告③

はこだてルネサンスの会

「函館文学散歩」の発行と調査研究活動

～函館の財産である旧市街地の芸術文化の足跡を発掘し、発信するための函館文学マップ～

代表 西堀 滋樹

📌 活動の目的

「どうしてこんな所に来たの？何もないっしょ」函館へ移住してきた方が、地元の人にこう言われたという話を聞いた。それが函館人特有の「照れ半分のぶっさらぼうさ」なのだと思う一方、では何があると答えるのだろうかと考えた。

もちろん、函館には歴史的な景観や建物が数多くあり、それらを楽しみに多くの観光客が訪れる。だが、この街にあるのはそれだけではない。多くの人たちに知ってほしいのは、この街にいた多くの才能あふれた人物たちのことだ。有名な土方歳三や高田屋嘉兵衛や石川啄木だけでなく、多くの逸材がこの街で生まれ育ち活躍した。そして、それら人物のゆかりの場所や作品の舞台がこの街中には多く残っている。だから函館に住む者たちが胸を張って誇るべきことは「モノ」(＝ハード)だけではなく、「ヒト」(＝ソフト)もなのである。そんな函館の財産である「ヒト」のことをいろいろな方法で観光客に伝え、あるいは若い世代へと継承してゆくのが、はこだてルネサンスの会の目的のひとつである。

2006年秋に発足したこの会は、これまで自主講座・講演会を中心に活動してきたが、今回、活動の一環として、函館にゆかりある文学者・文化人などを紹介する冊子を作成した。

📌 活動の内容

文学ガイドブック「函館文学散歩」の発行

ガイドブック「函館文学散歩」はウォーキングマップ＋文学の歴史とを重ね合わせた文学ガイドマップを目指し、カラー写真を多く載せ、見やすさ、わかりやすさを前面に打ち出す構成にした。内容的には文学関係を中心に函館にゆかりのある六十名近くの人物を紹介し、これまでほとんど触れられてこなかったり、その全体像が明らかにされていない人物など、言うなれば「まだ磨かれていない原石」のような人物も登場させた。それらの人物がやがて、地元の誰もが知っているような人物＝財産となり、観光客や若い世代へと紹介したり伝えてゆけるようになればと期待している。

編集作業は事務局員を中心に原案を作成し、実際に地図を片手に街中を歩きながら、場所と人物とを確認する作業を行った。また、原稿執筆を始め、各種資料や写真収

集、そして現地の写真撮影や資料掲載の承諾作業などすべて会員自身の手で行った。そのとり組みの中で、わたしたち自身がこの街の文化の深さなどについて改めて認識を新たにし、深めてゆく効果も生まれた。

📌 活動の成果

今年度から小学3年生から中学1年生までの異年齢集団として「函館文学散歩」(頒価500円)は市内各書店や函館市文学館、旧市街地の観光地域の喫茶店などに置いてもらっているが、順調に冊数を伸ばしているようである。手に取られた方々からの評判も良く、「函館にこんな人物がいたのか」「函館の奥深さを知った」「本をガイドに街中を歩いてみたい」という声が寄せられている。また、函館の歴史や文化、さらに観光に関する講座や講習会などで、テキストや副教材として活用したいという問い合わせもある。今後、地元の人間だけでなく、観光客や文学愛好者にも紹介してゆきたい。

📌 今後の課題

今回の「函館文学散歩」の中で扱っている人物の多くは、紙面の関係で紹介程度にしか触れられていない。今後、それら人物の全体像や偉業について、さらに掘り下げて紹介するために、自主講座や講演会などを定期的に行い、それらの人々について知ってもらうようにしてゆきたい。また、冊子の文学マップ的な側面を活かすために、会員がガイド役となり冊子をテキストにして、旧市街地をみんなで歩き、それら人物の紹介や文学作品の舞台となった場所を巡ってゆく機会を作ってゆきたい。

今後、このようなとり組みを継続して行うことで、函館の財産である「ヒト」を全国的に紹介・発信することで、旧市街地の歴史的価値を高めてゆきたい。



函館市公民館活性化ネットワーク イキ！ネット

公民館マチネ ワンコインコンサート

代表 松石 隆

活動の目的

公民館マチネとは、以下の4つを目的に定期的に開催する音楽会です。

①良質の音楽会を、安価で、函館市公民館で提供し、函館の音楽文化振興に貢献する。

②多くの市民に、函館市公民館へ足を運んでもらうことにより、函館市公民館の現状を知ってもらう。

③函館市公民館の文化交流・発信拠点としての利用可能性と問題点を、聴衆・出演者へのアンケートから抽出する。

④函館市公民館を利用しやすくするためのユーザのアイデアを実験する。

マチネとはフランス語で昼公演の意味です。夜公演(ソフレ)に比べて、カジュアルなコンサートです。

本助成金では、特に良質の音楽を提供するためにゲストを招聘するための交通費等、また、より多くの市民に函館市公民館に足を運んでもらうために、ワンコインコンサートを実施するためのコンサート開催費用の補助を中心に、目的達成のために必要な事業に充てました。



活動の内容

助成対象期間における公民館マチネの開催記録を表1に記しました。出場者数延べ48名、来場者数延べ1449名と、予想以上に多くなりました。また、アンケートが896通集まり、回収率は62%に達しています。この回収率は、音楽会のアンケートとしては異例に高い数字です。

活動成果

活動の成果を4つの目的に沿ってまとめます。

①函館の音楽文化振興への貢献

一流の演奏家に低安な出演料で演奏して頂き、1500名近くのお客様にご来場頂けたことを考えると、函館の音楽文化振興に一定の貢献があったと考えられます。また、公民館マチネを参考にし、スロバキア国立オペラや東京在住の演奏家による音楽会DUO CONCERTANT

が開催されるなど、函館市公民館を音楽文化発信拠点として利用する例が見られるようになりました。

②函館市公民館の認知

1500名近いご来場者のみならず、把握しているだけでも15に上る関連新聞記事により、函館市公民館の存在とその現状、また函館市公民館の活性化が必要とされている現状を広く市民に知って頂けたことと思います。

また、公民館マチネをはじめとするイキ！ネットの活動は、逐次ホームページ <http://www3.to/ikinet/> に掲載され、この内容は広く全国に発信されており、函館市公民館を知ってもらうことに役立っています。

③函館市公民館の文化交流・発信拠点としての利用可能性と問題点の抽出

集められた896通のアンケートは、全て電子ファイルとして記録し、分析できるようにしてあります。アンケートの粗解析の結果、公民館来場者の半数以上は自家用車での来場であること、駐車場、トイレ、空調、バリアフリーの整備が求められている事などが分かりました。



④ユーザのアイデアを実験

駐車場不足をユーザのアイデアで解消する試みとして、近隣飲食店の駐車場を利用させてもらう「マチネランチ」、臨時バス「公民館マチネ号」の運行、および近隣国有地の一時利用による「臨時駐車場」開設を行い、自家用車利用者に広く利用されました。また、ホールの利用についても、開演ベルの持ち込み、反響板の設置、地下口ビーの待合室としての利用等で工夫をし、現状の公民館の使い難さを一定程度改善しました。

今後の課題

公民館マチネを継続して開催し、より多くの市民に函館市公民館を認識して頂くとともに、函館市の音楽文化振興に貢献していきたいと考えています。また、得られたアンケート結果の分析を急ぐとともに、シンポジウム等を開催して函館市公民館活性化のために、市民の声を束ねる活動を強化していきたいと考えています。

公民館マチネ開催記録

回	日付	副題	出演者数	入場者数	当日券	アンケート回答数
第貳回	2007/4/8	どこかで聞いているクラシック	6	267	61	183
第参回	2007/6/24	チェンバロを囲んで	5	186	37	110
第四回	2007/9/30	イタリアの光	7	113	50	80
第伍回	2007/12/2	クリスマスがいっぱい	20	291	0	157
第六回	2008/2/17	華麗なるフルートの饗宴	4	265	40	148
合計			48	1449	264	896

TOPICS ～ハコダテ150～

来年、函館市は開港150周年を迎えます。その公式ウェブサイト「ハコダテ150」は着々と開催される記念事業の情報だけでなく、市民目線での函館の情報を提供するという2本柱から構成されています。

まだ、本ウェブサイトのコンテンツの制作・アップロードは実行委員会に属する市民のボランティアのチームが行っており、文字通り「市民協働ウェブサイト」となっています。

<http://www.hakodate150.com/>



第16回助成活動募集のお知らせ

皆で汗を流せるまちづくり活動を しませんか？

公益信託も**あと5回**となってまいりました。いままでの皆様の研究・活動の成果を踏まえて函館の町に元気な風を吹き込んでみませんか？

■募集内容

函館のまちづくりに関わる市民レベルの様々な活動や企画の**実践**。そのために必要とされる研究。最終報告会への参加等による交通費は支給されませんので、その旨あらかじめご了解ください。

1. 建物の色彩や意匠の改善に寄与する活動
2. 町並みの改善・保全に寄与する活動
3. 知的財産の発掘と紹介に寄与する活動

ただし、活動の成果に顕在性(衆目に触れる)と持続性(数年間)が見込まれる実践的活動であることを重視します。応募資格は函館市民に限りません。

■応募期間

平成20年12月～平成21年1月末日

■審査方法

当基金の運営委員会により審査・選考を行い、住友信託銀行が決定します。今回は西部地区を重点整備エリアと位置付け、ここでの活動を優先しますので、あらかじめご理解の上ご応募ください。尚、応募された方には運営委員会の直前に、説明・アピールの機会が設けられます。

■選考結果の発表

応募者全員に個別に通します。「から」27号でも発表します。

■助成金額

原則として1件あたり10万円～100万円まで。

■運営委員

- ◎木村 健一(公立はこだて未来大学 准教授) ※運営委員長
- ◎足達 健夫(専修大学北海道短期大学 准教授)
- ◎小原 雅夫(元町画廊 経営、元 函館中部高等学校教諭)
- ◎小山 一彦(小山設計所 経営)
- ◎森下 満(北海道大学大学院 助教)
- ◎山本 真也(函館市都市建設部長)

■申込書提出先

住友信託銀行 リテール企画推進部 公益信託チーム
〒100-6611 東京都千代田区丸の内1-9-2
(グラントウキョウサウスタワー)

TEL 03-3286-8218 FAX 03-3286-8792

■活動報告

助成を受けた活動は平成22年の2月の報告会にて発表をお願いします。

また活動成果はニュースレター「から」27号にて掲載しますので、事務局あてに報告書と写真等の資料を提出してください。

なお、会計報告(助成金使用報告書)は、平成22年2月までに住友信託銀行あてに提出してください。

■応募用紙請求先

函館からトラスト事務局

〒040-0001 函館市五稜郭町19-15

TEL 0138-52-8411 FAX 0138-52-8170

※ホームページ(下記)からもダウンロードできます。

編集夜話

世界中が錬金術の綻びに翻弄された年となった。より良い住環境を求める人間の欲求につけ込み、土地や建物を投機の対象として拡大してきた無謀な経済活動の結果、実生活からかけ離れた数字に世界中が振り回されている。サブプライムローンに象徴される住み手の状況が無視された数字の世界では、生きることや住まうことへの細やかな気配りや謙虚さが感じられない。

本来、住まいは日々命を紡ぐ家庭そのものであり、町並みはそこに住んでいる人々の息づかいや思い、地域の個性や歴史を反映しながら、人間の心を豊かに育む大切な環境である。しかし、金儲けの手段として供給された建物によって変えられた町並みは今後どのように変貌を遂げるのであろうか。真新しい

い建物も年々古びていくなかで、どんな住み手がどのように向き合い、暮らしていくのだろうか。

今年も、谷地頭町の建物3棟がペンキ塗りボランティア隊によって塗り替えられた。連続3年にわたる塗り替えは、色彩による町並み再生手段であると思う。何よりもそこには暖かい人間の手のぬくもりがある。

公益信託函館色彩まちづくり基金の助成は残すところ5回である。

ペンキ塗り活動を中心に、町づくり活動の原点を再認識できるような活動を期待したい。

2008年11月 河内 昌子

から第26号 発行:函館からトラスト事務局 発行年月日:2008年12月1日 編集:河内昌子
〒040-0001 函館市五稜郭町19-15 Tel:0138-52-8411 日昇商事内
からトラスト公式ホームページ:<http://www.h-nisshou.com/kara/>